

## 平成25年度長崎市提案型協働事業 1次審査会 会議録

- ◆ **日 時** 平成25年8月18日（日）13：00～
- ◆ **場 所** 長崎市男女共同参画推進センター アマランス 研修室1・2
- ◆ **審査委員会**
  - 審査委員長 山口 純哉（長崎大学経済学部 准教授）
  - 委員 井石 八千代（長崎商工会議所女性会会長）
  - 今村 晃章（福岡県 NPO・ボランティアセンター 専門相談員）
  - 西田 憲司（長崎市政策監）
  - 松本 憲明（長崎市総務局企画財政部理事）
  - 尾上 泰啓（長崎市経済局商工部理事）
  - 事務局 市民協働推進室

### ◆ 1次審査会の次第

- (1) ながさきダンカーズ倶楽部 担当課：市民協働推進室
- (2) NPO 法人長崎斜面研究会 担当課：まちづくり推進室

### ◆ 団体発表後の質疑応答

#### (1) ながさきダンカーズ倶楽部

##### 【委員】

プレゼンにいられている2人が新しく入られたということで、団体に入られた感想などをお聞きできれば。

##### 【ダンカーズ倶楽部】

私は3月に退職して、今後何をしようかというときに、もっと仕事をしたいなと思い、職業安定所やシルバー人材センター、そのほか色々な官公庁に行ってみた。そんな時にこの団体の活動を知って、今までの仕事以外の仲間作りをしたいという思いがあったので、少し顔を出したのがきっかけ。団体には色々な職種の方や今まで接することがなかった仕事関係の方や色々な特殊技能を持った方がいて、そんな人たちと出会えたのが、第2のスタートとして自分のこれからの人生の糧になるのかなという思いがしている。団体で活動していく中で、自分たちが持っている経験やスキルなどを生かす場がほしいというのが、実感としてある。

現在は、何か手伝いができればということで、ブリックホールのサポーターに登録したり、聴覚障害者の要約筆記の講座に行き、要約筆記のボランティアができないかなど動いている。やはり何か役に立ちたいという思いをどなたも持っているのではないかなと思う。そういうことで行政の分野でも自分たちの力が役に立つ仕事がないかなという思いでいる。

【ダンカーズ倶楽部】

私も3月に定年を迎え、60歳になったときに、これまでに自分の人生を振り返ってみるとこれまで何をしてきたのかという疑問が生じてきた。友人と酒を飲んでいる時に、人生を振り返ってみて、何もないことがわかり、その友人からこの団体のことを聴き、飛び込んでみた。4月から団体に入って活動をやり始めたところなので、現時点では感想はない。これから作っていこうと思っている。

【委員】

まず、行政との協働ということ、協働の趣旨の部分はどういうことを行政側に求めるのか。どんな風になると相乗効果が上がるように考えているのか。もう1つは、白書の内容は、具体的にどういう内容で提案しようとしているのか。形式など具体的に想定しているイメージがあれば教えてほしい。

【ダンカーズ倶楽部】

すみません。1点目をもう1度。

【委員】

行政と協働する意義と相乗効果はどういったものを期待しているのか。行政でないといけない部分とは何なのか。

【ダンカーズ倶楽部】

先程言ったように、65歳＝高齢者という一括りの捉え方がされているということ。長崎市は、高齢者に対する色々な施策を打っているが、おそらく今までの高齢者に対しては通用したものが、団塊世代がだんだん高齢になっていく時には、対応しなくてもいいような施策やお金の使い方が出てくると思う。そういう部分のために、実際に65歳を中心とした高齢者と言われる人たちがどんな意識で生活しているのかといったところをきちんと調査したいということが、今回の事業の目的。

もう1つ、相乗効果について。長崎市と、NPO 法人新現役の会長崎センターが、協働事業として「ながさきダンカーズ」という情報誌の発行事業をやってきた。現在インターネットで「協働事業、団塊世代」で検索すると、すぐに「長崎市」が出てくるぐらい、長崎市では、団塊世代と市が協働の事業をやって、1つの成果ができてきていると全国的に周知されている。だとすると、そんな長崎市が、更に高齢化の社会を迎えるならば、もっとそれを土台にして色々な活動を進化させて、住みやすい生き生きとした社会を作っていきたいといったところを狙っているということが1つ。それと、3万人ほどいる60～69歳から2,000人を抽出し、アンケートの調査をやっていく。これは今回の事業の大きな柱。自分たちが住んでいる生活環境については、市がやっている意識調査でも掴むことができるが、団体としては、これからどんな長崎になってほしいのかとか、どういう生活をしていきたいのかといったところを具体的に引き出したい。これは、自分たちの世代がやることがおそらく精度が高まる

のではないかと考えている。ただ、アンケートの内容については、採択になってから長崎市と一緒に具体的な項目を集めていきたい。

**【委員】**

2点聞きたいことがある。事業内容で、2,000人を無作為抽出してアンケートをするとある中に、アンケート郵送、催促文書の郵送は長崎市という表現があるのが、これは長崎市が行うということか。それとも団体が行うのか。

**【ダンカーズ倶楽部】**

2,000人の抽出は団体にはできないので、長崎市にお願いして、発送や回収については団体が行う予定。

**【委員】**

もう1つ。聞き取り調査については、目標50人を団体のネットワークを利用して行うということであったが、対象者はどのような人になるのか。また、調査の内容について、一般のアンケート調査と違った設問で聞き取りをするのかなどを教えてください。

**【ダンカーズ倶楽部】**

現時点ではアンケートと中身は全く同じと考えている。アンケートの中に自由記述欄を設ける予定であるが、その意見を書く人は少ないのではないかと考えている。例えば長崎市が行っている市民意識調査などでも、1,000通返ってきた中で自由に意見を書いているのが380人。自由記述に記載するような内容をきちんと引き出したいということがあって、団体のネットワークを使いたいと思う。ただし、市民活動などを行っている方に行うと、全く答えが同じになってしまうので、一般市民や団塊世代の人たちを抽出した形でやっていきたいと思っている。

**【委員】**

その具体的な抽出方法は。

**【ダンカーズ倶楽部】**

まだない。

**【委員】**

今回の事業について、現時点では委託で行いたいという意向のようだが、例えば団体が中心となって補助で行うということもあるかなと思ったが、もし補助となった場合、事業を実施するかどうかお聞きしたい。可能性としてどうかというところを伺えれば。

**【ダンカーズ倶楽部】**

今回応募するときにも、団体にとって大きなテーマだった。委託事業にならないと、今の

団体の体力ではできないだろうと考えている。また、今回の事業を予算100万円としているが、これが実際にやれるのかどうか、まだ多少不安なところがある。というのは、今2,000通出して、600件の返送あることを考えているが、長崎市の市民意識調査は50%以上の回収率になっている。なので、2,000名に出した調査票が、1,000通以上返ってきたら、今の私たちが考えている集計などが、予算の範囲内でできるかどうかといったところが少し不安材料となっている。やはり今回提案した事業は基本的には委託事業になっていないと、少し難しいと考えている。

#### 【委員】

公表できる範囲でいいが、外部のデータ集計、分析作業というのはどちらにお願いするつもりか教えてほしい。

#### 【ダンカーズ倶楽部】

これはソーバラさんという方。IC3という国際の免許証を持っている方で、長崎県のアンケートのクロス集計をこの前やったという実績があると聞いている。

## （２）NPO 法人長崎斜面研究会

#### 【まちづくり推進室】

企画書の中で数点ほど質問、確認したいことがある。

まず企画書の中で、協働の必要性の項目に記載している部分について、実はまちづくり推進室は斜面地の事業をやっているが、ここに記載してあるような地区の活動を運営している町内会・老人会・子ども会などに関する人的情報など地区の詳細な情報については、現実問題として把握していない。我々と地域との関わりについては、先程ワークショップの話ができていたが、もう10年以上前に各地区で散々やった。その中で、面的整備の方策を住民の方と一緒に考えて、やっていこうとスタートしているのが、10数年経って、できることできないことがはっきりしてきた。そういった意味でのノウハウは、我々は持っている。地域の方が施策に対して、どういうリアクションをされるだろうかなども把握しているが、現状のこのような地域の詳細な情報については、申し訳ないが、把握していないので、ここの点については、後日確認させてほしい。

協働による相乗効果のところの下から2行目の担当部署が有するノウハウについては、先ほど言ったようなできることとできないことがはっきりわかってきていることと、その理由などは、ノウハウとしてあるが、それについて今後どう展開していくかというふうな岐路に立っているというところ。

質問については、提案事業の目的の部分に、住環境改善について具体的に検討することと記載があるが、行政としては、その後の実践をどのようにしていくのが非常に気になり。団体として、住環境の改善策をただ提案するだけなのか、その後の実践まで行っていくつもりなのかを確認したい。

【NPO 法人長崎斜面研究会】

検討して提案するだけとは思っておらず、その課題について地域の住民の方と行政と団体とが一緒になって、可能な限り、実現に向けて取り組んで行きたいと考えている。

ワークショップで出てくる意見についても、色々なものがあると思う。先ほど短期的な話と説明の中でも言ったが、長期的な話と短期的な話と両方必要だと思う。そのときに、その辺りも含めて、色々な検討を進めていきたいというふうに考えている。

【委員】

事業の実施場所が愛宕3丁目という具体的な地名が出てきているが、現時点では地元の町内会や自治会などの組織や住民とのやり取りや折衝は、そんなには進んでないという状況か。

【NPO 法人長崎斜面研究会】

指摘のとおり。今ほとんど進んでいない状況。事業が来年からなので、うまくいきそうだという目処がついた段階で、少し地元に入っていきたいと考えている。現時点では愛宕3丁目と設定しているが、もっと可能性の高いところがあれば、そこに変更することも可能。頭の中に入れてはいる。

【委員】

事業がもし採択された場合、事業は絶対にやらないといけなくなってしまう。そうなったときに、実際に取り組もうとしている地域の人たちが協力してやれるのであればいいが、やれるかどうかかわからない段階では、やれない可能性もあるということ。事業を提案する際は、その地域でちゃんとやれるという状況が必要となる。現時点でもすぐに地域に折衝に行くことは可能なのか。

【NPO 法人長崎斜面研究会】

そのように考えている。現実的にやっていかないといけないと思っているので、それは十分にやっていきたいと思う。

【委員】

ワークショップのことで伺いたい。小島地区ふれあいセンターで参加予定数20~30名で8回実施すると予定されているが、この参加予定者の、年齢構成や参加者を選ぶ方法が自由参加なのかどうかなどお聞きしたい。それとスタッフが10名参加とあるが、どのような仕事をするのかをお聞きしたい。

【NPO 法人長崎斜面研究会】

参加者については、地域の住民の方であれば、なるべくたくさんなたでも参加してもらいたいと思っているし、そんな呼びかけをする予定。スタッフについては、長崎斜面研究会には、医療関係者、福祉関係者、大学関係者など色々な視点を持った人材がいる。ワークシ

ヨップなので、ファシリテータもやらないといけないし、そのほかにも色々な係がいると思うので、そんな雑用を斜面研究会のメンバーで引き受けたいと思う。もちろん学生ボランティアも入れて、引き受けたいというふうに考えている。

#### 【委員】

質問というか、確認。最初の説明を受けて、斜面地ではタテ道はあるけど、ヨコ道が足りないので、ヨコ道を個別具体的にやっていく事業と理解した。今回の事業の目的やスタッフを見ると、福祉であったり医療であったり、いろんな方がいる。それを考えた時に、今回の事業は本音として、各地域の個別具体的な事例について対応していくものなのか。例えば災害のヨコ道を作るとか。もしくは最適な斜面暮らしのためのモデルケースなど全体的なことをやっていきたいのかをお聞きしたい。

#### 【NPO 法人長崎斜面研究会】

はっきり言って、災害の整備というのは、短期的には必要だと思うし、整備する意義は大きいと思う。でも、それだけではなくて、ハードの整備を行うだけでは何もいきてこないと思う。その中に、実際に住んでいる住民の方の毎日の生活を考えるとどんなシステムが必要なのか、また、コミュニティのつながりが足りなくて、それを調整することで、ハードの欠点を補うことも可能なのかもしれない。むしろ、そっちのほうの方が大事かもしれないし。そのあたりも併せて、研究・提案していきたいと考えている。

#### 【市民協働推進室長】

この最終的な提案の形は、どのような形で出てくるのかなということをお聞きしたい。

もう一つは、先程まちづくり推進室長の質問でもあったが、ワークショップ後の提案内容の実現について行政と一緒にやっていこうという意思があるのかお聞きしたい。

#### 【NPO 法人長崎斜面研究会】

成果については、全体のイメージを出すということが必要と思う。全体のイメージと具体的な方策。具体的な方策は、図面にまで起こす必要はないと思うが、平面図の中に、こんなことを考えていると落とし込むぐらい。次の段階は実現の段階なので。

ただ斜面研究会の中には、医療や福祉関係者もたくさんいるので、その人たちの観点も踏まえてハードをただ整備するだけではなく、そのハードを整備することによって、どのような問題が克服されるのかということまで含めて提案できればと思っている。

#### 【委員】

現在の予算は、長崎市の委託事業という想定で作られているが、もし、補助事業となった場合、経費の1/5を団体で負担することになるが、その場合でも、団体としては、ぜひこの事業をやりたいと考えているのか。

## 【NPO 法人長崎斜面研究会】

そのように考えている。大きい金額だが何とか捻出したい。この団体は、もともと斜面市街地に住んでいる人たちの生活支援をする団体。今までの活動は、個別の対応をやってきた。そのような活動も重要であるが、もっと地域の中に入って、そういう活動を広めていきたいと考えている。

## 委員長コメント

発表および質疑応答ありがとうございました。短い時間でしたが、拝見させていただいた所感を簡単に述べたいと思います。

2団体ともなかなか行政も民間企業も手を出せない事業で、ながさきダンカーズ倶楽部さんの事業は、団塊世代の生きがい喪失等も含めてそれをどうやって作っていくのか、当事者でないと知らないというところに焦点を当てた事業で、長崎斜面研究会さんは、斜面地の暮らしという長崎の斜面のことをよく知らないといけないし、担当課もなかなか情報を持っていないような、そういう部分に光を当てた事業だったと思います。

ただ、本日2団体ともに共通したのは、プレゼンテーションのところ。2団体とも、団体の強みというのが全然表に出されていないのかなと思いました。例えば、ながさきダンカーズ倶楽部さんは、実際に今まで『ダンカーズ』という情報誌を、2年間発行されてきて、その中で色々な情報や、団塊の世代の人たちに活躍してもらおうノウハウをお持ちだと思うが、そこがどんどん押し出されていない。

斜面研究会さんは、スタッフの名前をズラッと見るだけで色々な方面から地域の暮らしを作り上げるもしくは考えることができる専門家のみなさんがあられだけ集まっているのに、発表の内容が、今回の事業の説明が中心になって、その専門的な力がどう発揮されるのかが出てこなかったというのは、少し残念だったかなと思います。一言で言うと、「こんなことできるのは、地域でうちだけしかないでしょ」という特徴が全面に出てくると、行政との役割分担などが明確に見えてくるのかなというふうに思いました。

一次審査通過した場合、行政との事業調整がありますので、ぜひ今後調整する中では、存分に団体の強みを全面に押し出して、調整を進めてほしいと思います。

もしかしたら発表が10分では短いのかもかもしれませんが、その辺りは今後考えるべきところでもあるかもしれませんが、以上簡単ですが、委員長としての所感に代えさせていただきますと思います。